海外舞踊文献紹介

舞踊人類学に関する研究動向と文献紹介

遠藤保子

1．はじめに

舞踊人類学Dance AnthropologyまたはAnthropology of dance[i]の典型的な研究対象としては，これまでは非ヨーロッパ社会，非工業化社会あるいは非文字社会における舞踊を取り扱うことが多かった。しかし，今日のアメリカ合衆国（以下アメリカ）ではこのような社会の相違による舞踊研究ではなく，舞踊という研究対象そのものを人類学的に考察すべきだという考え方から，クラシックバレエ（Kealiinohomoku，1983）やコンタクトインプロビゼーション（Novack，1990）なども研究対象になり，あるいはカルチュラル・スタディーズに代表されるような新しい研究ともかかわって舞踊に関する研究が展開されている。

舞踊人類学よりも古い言葉である民族舞踊学は，アメリカの研究者が，舞踊の文化変容について考える研究分野であった。したがって，アメリカにおける民族舞踊学とは，民族音楽学と同じようにアメリカの先住民や移民集団や非ヨーロッパ社会の舞踊に関する研究，あるいは民俗学と同じように伝統的な農村社会と新しい都市社会における舞踊の比較研究であった。いっぽう，ヨーロッパにおける民族舞踊学Ethnochoreologyは，民俗学と音楽学の分野から出発したため，研究者は自国の伝統に関する研究から始まり，今日では移民集団と都市の現代舞踊の研究を含むものに広がってきている（Youngerman，1998）。このように欧米における舞踊人類学と民族舞踊学という言葉は，意味する内容が微妙に異なっている。しかし，ここでは広義の意味で両者とも舞踊人類学ととらえ，原稿枚数に制限があるため，対象としては，アメリカとヨーロッパの研究者（あるいはそれに準ずる人）が行った研究に限定し，①草創期，②確立期，③展開期と歴史的に研究の動向を探りつつ，重要と思われる文献[ii]を紹介したい。

2．草創期の舞踊人類学

草創期とは，具体的には19世紀後半から第２次世界大戦くらいまでを想定している。初期の人類学的舞踊の記述は，アジアやアフリカに行った旅行者や探検家，キリスト教の伝道者，アフリカの奴隷貿易商人など，アマチュアの人々が，ヨーロッパの舞踊を基準にしつつ，各地のさまざまな舞踊を「野蛮」や「未開」な社会における「プリミティブ」な舞踊として記述している。これは，アマチュアだけにとどまらず，イギリス人類学の創始者の一人であるF. B. タイラーTylorも，文明社会と「プリミティブ」な社会との対比によって舞踊を検討している。タイラーは，ダーウイニズムの洗礼を受け当時全盛であったスペンサーの進化論に基づき，現実にある文明の違いは発展段階の差によるものと考え，さまざまな文化をヨーロッパ文化にどのくらい近いのか，つまり進化の段階はどの程度かを考える進化論者であった。こうした流れの中で舞踊を中心テーマにした数少ない書物として，L. グローブGroveが1895年に著した『ダンシング』がある。（バドミントンライブラリー[iii]の中の一巻。写真１，２，３参照）。リリーは，スコットランド，フランス，イタリア，中国，日本など世界各国の舞踊を対象に記述しているが，第３章では，野蛮人の舞踊としてイロコイ族やブラジル，あるいはエチオピアなどをとりあげ，宗教的な要素が強い舞踊として描いている。こうした例外もあるが，その当時の舞踊研究は，その社会を知るための研究手段として取り上げられることが多かった。

20世紀初頭になると，アメリカ人類学の父フランツ・ボアスFranz Boasに導かれた人類学者が，舞踊が儀礼の中で重要な位置をしめているアメリカ先住民の社会について研究を行った。ボアスは，それまでの進化論的なヒエラルキーの中に単一の存在であった文化を，複数の並列的な文化としてとらえる，つまり文化相対主義の立場にたった見方をした。ボアスの関心からは文化とパーソナリティの研究が展開され，アメリカ先住民の踊りをディオニッソス型とアポロン型にわけて論じたR. F. ベネディクトBenedictなどの研究に引き継がれていく。またイギリス人類学の創始者であるラドクリフ＝ブラウンRadcliffe-Brownは，インド洋のアンダマン島の舞踊は，踊ることによって解放感を味わい，自分の価値観を高めるなどと検討している。この研究の特徴は，舞踊を美的な側面だけではなく，社会的有用性に関しても評価していることがあげられる。そして，その社会とは，社会全体の相互連関や統合性を問題にするという，つまり静態的にみる立場で考えられている。社会のとらえ方には，この静態的立場と社会の全体的な変動や歴史的発展をダイナミックにとらえるという動態的立場がある。静態的な立場では，社会や文化の動態をとらえることができないという欠陥がある。社会動態の立場にたった舞踊人類学研究は，70年代後半まで待たなければならない。

一方，ドイツでは，文化圏理論の影響下にありながら1933年クルト・ザックスCurt Sachsが『世界舞踊史』を著している。文化圏説とは，文化の歴史的伝播は，１つの文化現象あるいは文化要素とみるのではなく，各社の文化要素が相関的に結合しているもので，この一群の文化要素の分布領

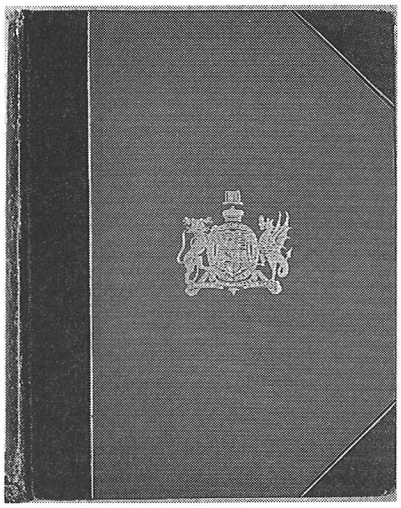

写真１　L. グローブ著『ダンシング』

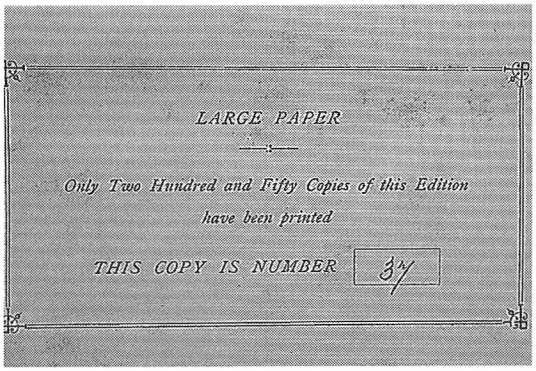

写真２　250部限定版のうちの１冊（コピー番号37）

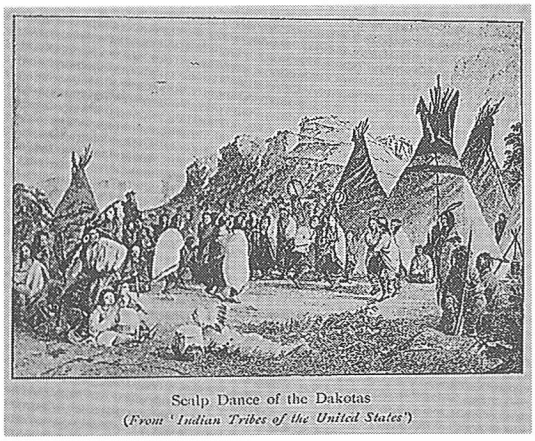

写真３ 本文に掲載されたアメリカ先住民によるスカルプダンス
（立命館大学岡尾恵市教授所蔵　金井淳二教授撮影）

域を指している。ザックスの研究はグローバルな規模で舞踊を分析しているのは評価できるが，考え方が西洋中心的であること，タイトルで示された世界の舞踊を網羅しておらず，しかも系統的でないことから，今日では専門書としては限界がある。また，舞踊人類学の最も古い博士論文の１つに，1937年コネチカットのイエール大学のW. フェントンFentonによる『セネカイーグルダンス・儀式におけるパーソナリティ研究』があげられる。

３．確立期の舞踊人類学

確立期とは，具体的には第２次世界大戦後から70年代くらいをさしている。この区分はあくまでも目安であり，必ずしも明確に区切られるものではない。未開社会の研究として始まった人類学は，大戦後その研究対象が拡大されていく。アメリカでは，中米社会や未開と文明の中間領域としての民俗社会や農村社会の研究がよりいっそう行われ，イギリスでは，植民地であるアフリカの部族社会の機構構造主義的研究やアフリカの都市社会の研究が開始された。そして人類学を専攻した研究者によって，舞踊人類学が本格的に研究されるようになっていく。50年代から60年代にかけての文化人類学は，アメリカ主導のかたちで集大成されつつあった。1960年，アメリカの舞踊人類学のパイオニアであるG. P. クーラスKurathが，「ダンスエスノロジーのパノラマ」という論文を発表した。舞踊人類学研究の国際動向を初めて概観したこの論文は，舞踊人類学の研究には欠かすことができない。そこで，内容をかいつまんで説明したい。論文は大きく３項目からなっている：①舞踊学と人類学における共通の課題…社会的関係（個と集団，男性と女性の役割，儀式的・経済的組織等），舞踊にかかわる課題（文化変容，文化の連続性，文化伝播の問題），関連諸科学との検討（心理学，言語学，考古学，音楽学）など　②舞踊分析の手順…分析のためのレコーディング法とラバノーテーションやその他の記譜法によるスタイル分析など　③研究の実際…レコーディングのためのテクニック，舞踊人類学者のトレーニング法，ティームワークの重要性など。

クーラスの研究テーマは，文化の伝播や文化変容などがあげられ，前述したボアスの影響が読み取れる。クーラスは，アメリカの舞踊人類学に大きく貢献したことから「民族舞踊学の母」とも称されている（Kealiinohomoku，1998：77）。クーラス以後，多くの研究者が人類学を専攻し，論文を発表していく。例えば，A. L. ケプラーKaepplerは，トンガの舞踊を対象に47の動きを言語学の分析法とラバノーテーションを用いて分析し，1967年ハワイ大学で『トンガ舞踊の構造』で博士号を取得している。J. W. ケアリノホモクKealiinohomokuは，1976年『アフリカとアフロアメリカの身体運動の構造連関における舞踊比較』では，グラフノーテーション（ラバノーテーションを改善した記譜法）を用いてアフリカ（ナイジェリア）とア

フロアメリカの舞踊を比較し，同年インディアナ大学に博士論文『人類学研究の理論と方法』を提出している。博士論文では，人間の行動としての舞踊は，生物学的心理学的枠組の中で，しかも文化的に変化するものとして研究されなければならず，人間の行動を決定するのはバイオリズムが最も重要であること，そして比較の方法としては共時的と通時的比較があり，比較内容としては舞踊，ジェスチャー，音楽，言葉の4点にかんする共通点と相違点を明確にするなどが報告されている[iv]。J.L.ハンナHannaは，カリフォルニア大学ロサンゼルス校で人類学を学び，1976年コロンビア大学でナイジェリアのウバカラのダンス・ドラマを対象にした博士論文を提出し，展開期で述べる画期的な書物である『舞踊は人間の本質につながる』を著した。コロンビア大学といえば，ボアスの系譜を想起させるが，ボアスにはない新しい観点から舞踊をとらえている。また，A.P.ロイスRoyceは，1977年『舞踊の人類学』を著した。そこでは，対象とされる社会があまりに限定的であり，先行研究の重要な概念の記述が不明確ではあるものの，舞踊人類学を体系的にまとめた入門書として評価できる。

その他特筆すべき研究に，A.ローマックスLomaxとI.バーティニエフBartenieffが行った舞踊計量学Choreometricsプロジェクトがある。これは，ザックスが行った地域研究の延長線上にあるが，より精密でシステマティックな地域研究と位置付けることができる。プロジェクトでは，経済的・社会的にみて対照的な世界を代表するアメリカ先住民，オーストラリア，アフリカなど7地域を抽出し，その社会・文化で踊られている舞踊と日常動作を撮影した200の映像フィルムをもとに分析を行った。舞踊の動きは，日常動作の中でよくみられるパターンを様式化したものであり，舞踊と労働は集団の組織化と相互作用を写し出しているとされる。このプロジェクトの問題点としては，文化を代表しうるサンプルをどのように抽出するのかが指摘できる。しかし，分析手順を明確にしながら世界的な規模で舞踊の比較研究をしていることは評価される。

いっぽう，ヨーロッパの人類学，とりわけイギリスでは，植民地を対象に研究がすすめられた。例えば，ナイジェリアのイフェ大学で教鞭をとっていたP.ハーパーHarper（1969，70，72）は，ナイジェリアの舞踊を対象に日常動作や舞踊の特性を詳細に分析しながら，舞踊の機能主義的意味について検討している。ハーパーは，70年代後半イギリスへ帰国するが，その後ナイジェリア人研究者F.アジャイAjayeが，研究を引き継ぎ発展させている（Ajaye＆遠藤保子，1983）。

特に，70年代以降，イギリスの舞踊研究者は社会科学者と協力してセミナーや研究会を開催している。例えば，1979年ロンドン大学オリエント・アフリカ研究所で学際的セミナーが開催され，後述するP.スペンサーSpencer『社会と舞踊』（1985）という著作に結びつき，1982年には，社会学・人類学に関する初めてのイギリス舞踊学会が開催された。イギリスの舞踊人類学は，音楽者であるJ.ブラッキングBlackingによって確立されたといわれる（Grau，1993）。ブラッキングによれば，舞踊人類学では，①通文化的に舞踊の本質を理解することとボディムーブメントから舞踊学を発展させること，②舞踊の象徴性と非言語コミュニケーションに関する研究を行うことが重要であると指摘している。

さて，ドイツの特筆すべき収集・研究としては，1952年科学映画による百科事典的な集大成をめざした科学研究・大学教材用映像資料の国際収集運動，エンサイクロペディア・シネマトグラフィカがある。これは，映像でなければ説明が困難な事象や急速に消滅する危険性のあるものに関して生物学，民族学，人間行動関係の基礎的映像を制作・収集し，映像と付属論文をあわせて公開するものである。H.ギュンターGüntherは，その映像をもとにアフリカの舞踊の分析を行い，アフリカの舞踊特性としてポリセントリックとマルチプリケーション，それを可能にする身体の技術としてのアイソレーションをあげている。この研究は，より実証的であること，ジャズダンスとのかかわりを検討するのに有効である。

さらに，ハンガリーとエチオピア政府の要請によって調査・研究を行ったハンガリーの研究者T.バダセVadasyは，エチオピアの舞踊と音楽を初めてシステマティックに映像化し，それをもとにエチオピアの舞踊特性を分析・記述している。この研究は，ギュンターと同じようにエンサイクロペディアシネマトグラフィカの延長線上にあると考えられる。

4．展開期の舞踊人類学

展開期とは，具体的には70年代以降現在までをさしている。この時期は，ポスト構造主義といわれ，アメリカのC.ギアーツGeertzの解釈人類学，イギリスのV.ターナーTurnerの儀礼研究など新しい考え方が展開されている。ギアーツは，調査活動の前提となる「客観性」を問題にし，調査者の主観や調査者と調査地の人々の相関関係など，可変的な要素を考慮し，社会の理解に有意義であると認めた特定の象徴群の意味理解に専念するという解釈学的な人類学を主張した。ギアーツの「厚い記述」を参考に，D.スクラーSklarは，メキシコの祭りを事例としながら舞踊民族誌について論じている。

ターナーは，中央アフリカでのフィールドワークなどから『儀礼の過程—構造と反構造—』を著した。反構造というのは，構造のアンチテーゼで静態的な社会観を超えようとする概念である。ターナーは，ファン・ヘネップの通過儀礼の３段階区分[v]を踏まえて第２段階の周辺あるいは境界状況にみられる人間の相互関係に着目し，それをコムニタスと称した。コムニタスとは，身分秩序や性別，階級組織，など構造の次元を超えたあるいは捨てた反構造の次元における自由と平等な人間相互の関係である。そして，社会とはひとつの事象ではなく構造とコムニタスという段階を伴う弁証法的過程であるとした。前述したハンナは，ターナーの立場から舞踊を分析している。ハンナは，ナイジェリアのウバカラの舞踊に表現されている５つの世界観の原則を検討し，次にこの世界観におけるパラドックスを照らし合わせ，ウバカラの舞踊は，このパラドックスを解消し，男性対女性などの相対立する関係の，微妙なバランスを維持するのに役立つと論じている。ハンナの研究の新しさは，舞踊は社会における対立するものを表現するととらえる点にある。ハンナは，ウバカラの世界観はダイナミックなプロセスとしてとらえたターナーの社会的世界観と一致するとし，それまでの静態的な社会ではなく，動態的な社会の中での舞踊を考察したのである。この意味において，ハンナは，舞踊人類学の新たな展開に寄与したと考えられる[vi]。また前述したスペンサーは，コムニタスの反構造の考え方を援用しながら，『社会と舞踊』でカタルシスとしての舞踊，社会機能としての舞踊，儀礼ドラマとしての舞踊などの７項目から考察した。それによると，踊ることによって構造化された日常から解放され，境界領域をつくるが，結果的にはそれまでの階級組織に従わせる役目を果たしているという。

また，J.A.グレイGrayの『ダンスリサーチiv 1900－1990』[vii]の中に収録された，舞踊人類学関係の博士論文の提出時期で特徴的なことは，確立期で言及したように70年代中頃（75年に４件，76年に５件）に１つのピーク，さらに80年代後半（86年に５件，87年に４件，88年に９件，89年に６件）に２つめのピークを描いていることである。その中には，冒頭でも述べたように，C.J.ノバックNovack著である，参与観察，歴史的研究，人類学的解釈などをベースに研究された『舞踊を分かちあうこと—コンタクトインプロビゼーションとアメリカ文化—』など伝統的な人類学の対象だけではなく，しかも学際的な研究も含まれている。アメリカでは，カルチュラル・スタディズの視点から舞踊が考察されている。1970年代以降注目されだしたカルチュラル・スタディズは，単なる文化研究ではなく，芸術や文学などの狭義の文化領域とともに生活様式などの広義の文化領域も扱い，最近ではジャンダーやエスニシティなどの領域も扱うなど，広範な文化領域を取り扱っている。が，共通しているのは，文化を権力と社会とのかかわりでとらえることである（佐藤毅，1997）。例えば，S.マニングManningが，男性のまなざしによって女性のダンスがいかに規制されるかを論じた『女性の舞踊家と男性のまなざし』など興味深い論が展開されている。

５．おわりに

最後に，つい最近出版された文献を２，３紹介したい。D.ウイリアムWilliamsは，1997年と2000年に２巻にわたって，大学院生あるいは学部の３，４年生を対象にこれまでに報告された舞踊人類学に関するさまざまな興味深い文献を寄せ集めた本『人類学とヒューマンムーブメント』，1999年T.J.バックランドBucklandは，文化人類学のフィールドワークの客観性が問題になっているという今日的状況をふまえて，フィールドワークの理論，方法論的アプローチ，政治と倫理を問題にした『フィールドにおける舞踊—理論，方法，ダンスエスノグラフィー—』，さらには，2000年F.A.ソロモンSalamoneが舞踊だけではなく生活そのものを問題にし，子供の遊びや舞踊，祭り，スポーツ，ジャズやラップまで検討した『社会，文化，レジャー＆プレイ—人類学的文献—』を出版している。

以上のように，舞踊人類学は，文化人類学あるいは社会人類学の研究動向とある側面で連動しながら，舞踊とは何かを，グローバルにそして学際的に研究されてきたといっても過言ではないだろう。将来的には，研究がよりいっそう学際的になるだろうし，マルチメディア時代に対応したコンテンツ開発が今までにもまして必要になるだろうと考えられる。

文献紹介・引用文献

Ajaye，F&遠藤保子（1983）「身体とリズムのコミュニケーション」『エジプト・アフリカ—世界の国シリーズ—』講談社：132－143

Buckland，T. J.（Ed.）（1999）*Dance in the Field Theory, Methods and Issues in Dance Ethnography* ST. Martin's Press INC.，New York

Desmond，J.（1997）*Meaning in Motion —New cultural studies of dance—* Duke Univ. Press：Durham and London

Fenton，W. N.（1937）*The Seneca Eagle dance：A study of personality expression in ritual* Yale

Univ., Connecticut

Grau, A (1993) *John Blaking and the development of dance anthropology in the United Kingdom* Dance Research Journal 25(2)：21－31

Grove, L. and other writers (1895) *Dancing with musical examples* Longmans, Green, and CO., London

Gunter, H (1969) *Grundphanomene und Grundbegriffedes Afrikanischen und Afro-amerikanischen Tanzes* Universal Edition：Graz

Hanna, J. L. (1976) *The Anthropology of Dance Ritual：Nigeria's Ubakala Nkwa di Iche Iche* Ph.D. diss., Columbia Univ. New York

Hanna, J. L. (1979) *To Dance is Human：A Theory of Nonverbal Communication* Univ. of Texas Press：Austin

Harper, P. (1969) *Dance in Nigeria* Ethnomusicology Vol. XIII No. 2：280－295

Harper, P. (1970) *The Role of Dance in the Gelede Ceremonies of the village of Ijio* ODU A Journal of West African Studies- New Series No. 4：67－94, Univ. of Ife Press Oxford Univ. Press：Ibadan

Harper, P. (1972) *The Kambari people and their dances* ODU —A Journal of West African Studies— No. 8 Series No. 7：83－96 Univ. of Ife Press Oxford Univ. Press：Ibadan

Kaeppler, A. L. (1967) *The Structure of Tongan dance* Ph.D. Diss., Univ. of Hawaii

Kealiinohomoku, J. (1967) *Hopi and Polynesian dance —A study in cross cultural comparisons—* Ethnomusicology 11：343－358

Kealiinohomoku, J. (1976a) *A comparative study of dance as a constellation of motor behaviors among African and United States Negros.* Refrections and Perspectives in Two Anthropological Studies of Dance CORD Res. Ann. 7：1－179

Kealiinohomoku, J. (1976b) *Theory and methods for an anthropological study of dance* Ph. D. diss., Indiane Univ.

Kealiinohomoku, J. (1983) *An Anthropologist Looks at Ballet as a Form of Ethnic Dance* In：Roger C. and Marshall C. (Eds.) *What is Dance?*, New York, pp.533－549

Kealiinohomoku, J. (1998) *Kurath, Gertrude Prokosch* In：Cohen, S.J. (Ed) International Encyclopedia of Dance Vol. 4. Oxford Univ. Press：New York p.77

Kurath, G. P. (1960) *Panorama of dance ethnology* Current Anthropology 1 (3)：233－254

Lomax, A. and Bartenieff, I. (1968) *Dance style and culture* American Association for the Advancement of Science, pp.222－247

Manning, S. (1997) *The Female Dancer and the Male Gaze* Desmond editor Meaning in Motion Duke Univ. Press

Novack, C. J. (1989) *Sharing the dance— Contact Improvisation and American Culture—* The Univ. of Wisconsin Press：Wisconsin also Ph. D. (1986) Colombia Univ. New York

Quigley, C. (1998) *Ethnology*. Cohen, S. J. (Ed.) In International Encyclopedia of Dance Vol. 4 Oxford Univ. Press：New York, p.372

Royce, A. P. (1977) *The anthropology of dance* Indiana Univ. Press：Bloomington

ザックス：小倉重夫訳 (1972) 『世界舞踊史』音楽之友社：東京

Salamone, F. A. (2000) *Society, Culture, and Play —An Anthropological Reference—* Univ. Press of America Lanham, New York, Oxford

佐藤　毅 (1997) 「日本におけるカルチュラル・スタディズの現状と課題」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』33(2)：123－135

Sklar, D. (1991) *On dance ethnography* Dance research Journal 23/1：6－10

Spencer, P. (1985) *Society and the dance* Cambridge Univ. Press：Cambridge, pp. 1－46

Vadasy, T. (1970) *Ethiopian folk-dance* Journal of Ethiopian Studies 8 (2)：119－146

Vadasy, T. (1971) *Ethiopian folk-danceII : Tegre and Gurage* Journal of Ethiopian Studies 9 (2) : 191 −217

Vadasy, T. (1973) *Ethiopian folk-dance III : Wallo and Galla* Journal of Ethiopian Studies

Williams, D. (1997) *Anthropology and Human Movement The Study of Dance* The Scarecrow Press, Inc. Lanham, Md., & London

Williams, D. (2000) *Anthropology and Human Movement Searching for Origin* The Scarecrow Press, Inc. Lanham, Maryland., & London

Youngerman, S. (1998) *Anthropology* In Cohen, S. J. (Ed.) International Encyclopedia of dance Vol. 4 Oxford Univ. Press : New York, p. 369

註

i　舞踊人類学という言葉が使われだしたのが，アメリカ合衆国における舞踊の研究者，例えば，Kealiinohomoku，Royce，Kaeppler，Hannaなどが，人類学の理論を本格的に学び，1970年代にはそれまで表現されていた民族舞踊学Dance ethnologyより舞踊人類学といったほうが，より適切だったからである（Quigley，1998）。

ii　石福恒雄が，1982年「舞踊の人類学—展望と試論—」『舞踊学』第5号pp. 40−41ですでに基本的な文献を提示しているため，ここではあまり重複しないように配慮した。さらに，アフリカに関する舞踊人類学の研究動向は遠藤保子1989『舞踊学』第12号pp. 44−46　アフリカでもナイジェリアに限定した場合の研究動向は遠藤保子1985『舞踊学』第8号pp. 52−53，アジア舞踊の研究動向（東南アジア）に関しては，宮尾慈良1992『舞踊学』第14号pp. 20−21を参照。

iii　バドミントンの名称は，イングランド南西部の地名からとられ，その地に住んでいたボーフォート公爵とアルフレッド・ワトソンによって，1880年代から1900年代にかけて編集された。それぞれの巻には専門の執筆家と挿絵画家を配置するという当時としては画期的な方法がとられた。

iv　詳細は，遠藤保子1986『舞踊学』第9号p. 25参照。

v　ファン・ヘネップは，通過儀礼の3段階として，分離—周辺—再統合あるいは境界以前—境界状況—境界以後と区分している。

vi　ハンナのTo Dance is Humanに関しては，舞踊とジェンダーという視点から考察している研究：石黒節子他（1995）「舞踊とジェンダーに関する研究」『舞踊学』第18号pp. 45−46もある。

vii　アメリカにおける舞踊学に関する博士論文の提出は，1930年代頃から徐々に多くなり，60年代から70年代にかけて急上昇し，その後80年代にかけても増えつづけている。博士論文が多く提出されている大学としては，NYU，TWU，UW-M，Columbia，UNC，Ohioなどの順になり，スタイル別でいうとバレエ，モダン，フォーク，ジャズなどとなっている。

平成11年度　舞踊学関係修士論文題目一覧

修士論文題目	氏　　名	大学院名
・中学生を対象としたダンスの即興指導に関する一研究	白井　麻子	お茶の水女子大学大学院
・玉置真吉研究 －日本の社交ダンスにおける役割－	園部　真理	お茶の水女子大学大学院
・マット運動の技術指導に関する研究 ～高校における伸膝前転を題材として～	鈴木　千種	お茶の水女子大学大学院
・YOSAKOIソーラン祭りの参加者意識考	平田利矢子	お茶の水女子大学大学院
・「リズムダンス」の特性と指導法に関する基礎的研究	小寺　麻子	岡山大学大学院
・精神科デイケア・オープングループにおけるダンスムーブメントセラピーの実践過程 －４つの事例からの検討－	金　　英恵	神戸大学大学院
・ボディワーク時のBGM及びボディコンタクトに関する精神生理学的検討 －大学生と中学生を対象として－	近藤　正子	奈良女子大学大学院
・モダンダンスの回転に関する研究－全国舞踊コンクール技術部門受賞作品のビデオ分析－	阿部由紀子	日本女子体育大学大学院
・舞踊作品における90年代の傾向に関する一考察	稲毛　博美	日本女子体育大学大学院
・舞踊作品における音楽と動きの関連性－拍節音刺激による動きのリズムの形成について	今村　　文	日本女子体育大学大学院
・ピナ・バウシュ（PINA BAUSCH）作品に関する研究－作品『DANZON』を中心として－	安則　貴香	日本体育大学大学院
・イヴォンヌ・レイナーの代表的舞踊作品“トリオA”に見られる舞踊のミニマリズム，そしてその目的	関谷　雄二	日本大学大学院
・義経千本桜における無限性 －狐忠信を中心として－	申　　義珠	日本大学大学院
・中日舞台芸術文化交流史 －1949年から1999年まで－	安　　紅梅	日本大学大学院
・日・韓国大学舞踊教育過程の問題点（米国大学教育課程との比較を中心に）	文　　美淑	日本大学大学院
・三番叟をめぐって	大川あづみ	日本大学大学院
・ジョージ・バランシン研究 ～細部の技巧について～	川島　京子	早稲田大学大学院
・能の舞の表現	金　　新玉	早稲田大学大学院
・勅使川原三郎研究	高橋　彩子	早稲田大学大学院
・オスカー・シュレンマー『トリアディック・バレエ』研究－滑稽でグロテスクなダンス－	廣川　サラ	早稲田大学大学院
・ウィリアム・フォーサイスの‘Improvisation Technologies’に関する研究	渡沼　玲史	早稲田大学大学院

（以上，平成12年11月30日までにご回答いただいた該当論文を掲載いたしました。）